



日
二
新聞

定價一匁

第五輯

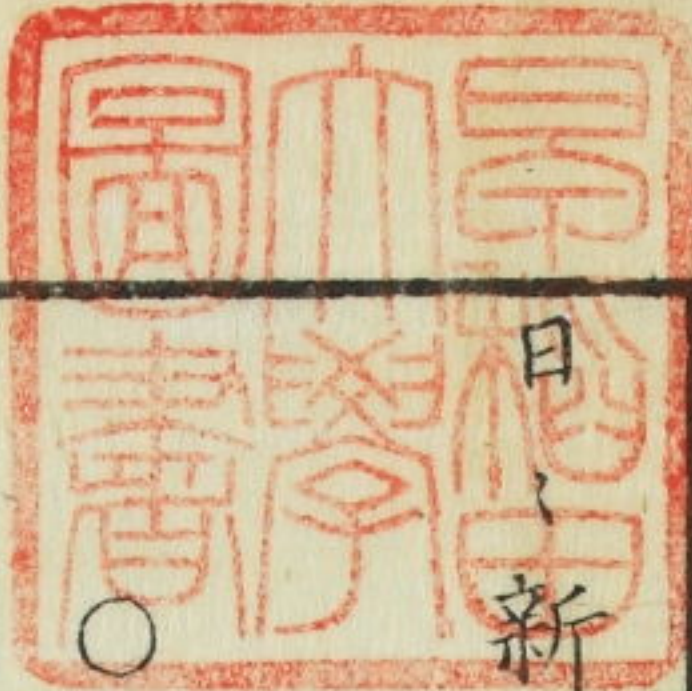
西垣文庫 時
文庫 10
7357
2



持 文庫 10
7357
2

日新 新聞才五輯

慶応四年辰五月一日出版



○羽州戦争の様相ハ略第二輯ニ来状の抜卷をの
せしむ其後稍委敷き報告を得たり故ニ又去
ノヨキナリ

閏四月四日之内の脱走人天童織田侯の城ニ迫り戦争
ニ及ビ一ガ天童降ニ落殊セリ付時上ノ山ニ在リクダ
長勢合セシ三百人^{え仙臺ニ在陣}此^{あり}を^{サキ}沢三位
殿を大将トシテ急ニ天童ニ押寄せ同六七日の以愈近
つも之内勢ト大ニ戦ヒ散^たクニ打ち敗^れルモ即死八十人

五

一

計り其餘ハ何方へ引去りや四月十二日の以てハ
 仙臺へハ一人も飯さる由あり又其時官軍より急ニ仙
 臺の所を黒田勢をして応援を告ぐるふ由り早速同処よ
 り操出せりとて途中より何方へ向ひりや是亦行術
 志々しくとも尤右の戦争中天童ハ城下を焼拂りて家中
 農商此程大方向あり殊ニ織田侯を始メ奥方女中一
 同立退られり何れも倉卒狼狽ききり有程とて憐
 れり折しも其中小妾の産後いよいよ日数も立りてを
 馬駕の自由も叶もさせハ徒行して仙臺の近在に道来
 りりてハ仙臺候ありの事を聞ひて金と米とを贈り厚

く扶助せしむしとそ又當時ハ仙臺よりし官軍ハ皆何
 方へ散せりや残れるもの甚と少かく尤九條殿ハ岩沼
 又在陣のよしあり

会津追討として兼り仙臺より操出りたる人殺凡二万
 余人秘中将殿とも国境より出張せりきりし四月
 廿八九日の頃同国信夫郡土湯つちかの境より少し密きこ
 是連ハ代官と同一く石楚いしかとの二ヶ所にて仙臺の番
 兵と聊ツとの小ざり合ありしとて怪我人も仙臺
 してハ僅よ一人有りしものもあきハ戦争といふ程

あしとやうに才四輯に載せしむる奥羽諸族の歎歎書ハ
仙臺岩沼古在陣の大総督九條殿に落しよる越
つて返く人殺も操りたりし

○閏四月十二日東海道三島宿より来状の抜書

當十二日相州足柄下郡真鶴村に侍二百人程上陸いし
しは処其隊の頭林昌之助様の家来四人は石連跡の人
殺のよし置し置し而大久保加賀守換に城下は西越ら成
重役は面會し上付友徳川家脱走人2員淵陳屋近し
焼拂右軍の進撃差迫りし無傷死越は昔々チチは
しと杉柄 徳川家より山岡某が徳様、おはし越

承以ハ直に内城下を引拂駿州の厨の殿場村へ
越成夫より甲府へ可にお越は風向より

右ハ才三輯上総富津の條は林肥後守嫡子云く船は
のり行衛をせりとつる定めし此所は才三輯なるな
らん

○

一 此頃舟橋辺戦争の跡見分し官軍方巡検
一節同所 太神宮の社兵火の為焼失しとるを見
て同社の神主を呼出し其始末并に神体遷坐の事
あしよく聞紀しの上し不取敢仮宮造管料として

右神主へ金十七兩与へらせし

○ 閏四月廿九日久留米の蒸氣船一艘品川より人救二百人餘乗組て早天よ出帆し是ハ何國へ赴きとる然いしと詳し

○ 同廿六日上州沼田領般若塚といふ所より官軍と脱走と戦争ありし趣安中の家来より報告り但し勝敗の模様はいしと分らざりし多分官軍勝利のよし

○ 閏四月十一日於京師御達書写

三條大納言

今般徳川□□降伏謝罪奉仰 天裁ハ上付以至仁之
叡慮寛典之由所置被 仰出以間速ニ東下億兆人心安
堵いし以様取計可致総て 由委任可為関東監察使
之旨 由沙汰以事

後四月

江藤 新平

右同断ニ付ふま附属ト 仰付仰事

小笠原唯八
新田 三郎

後四月

○
萬里まり小路こうじ辨

今般為關東監察使三條大納言三差下以間為附属東下
仰付仰事

後四月

○
三條大納言為關東監察使下向下
仰付仰事
仰出以間附属出

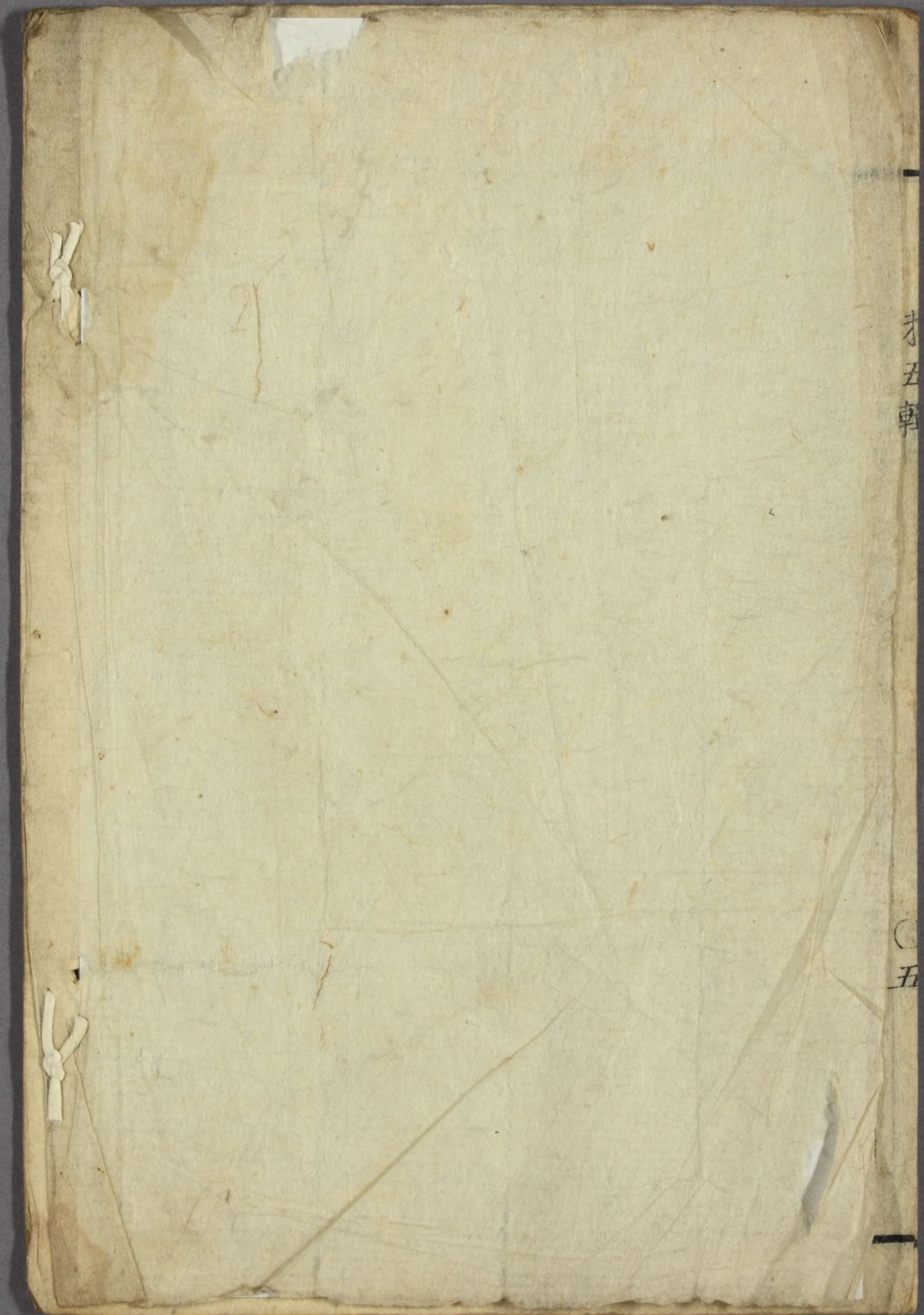
松尾 伯耆
中川 對馬

○
右の通り右仰渡渡以以付速速上京師發途同月廿四日江
戸へ着入城いとされ入り

閏四月廿二日参謀正親町少将殿木梨精一郎長州藩其外
 官軍百人余り急用有りとして品川宿より御軍艦富士
 山より同日九ツ時あり品川沖を出帆し上坂いささ
 れより由

同月廿三日開門丸といつる薩州の蒸気船品川沖へ着
 帆いささせたり

但し前より載せしる三條大納言殿を初として外六人
 この船に乗り来れる由なり



卷五

五